

カビ対策は予防が肝要

NPO法人カビ相談センター

理事長 高鳥 浩介氏

HACCP制度化の施行が目前に迫りつつあるが、食品施設の衛生管理において「共通の課題」「永遠の課題」といえるのがカビ対策だ。カビ研究のエキスパートとして国立医薬品食品衛生研究所衛生微生物部長などを歴任した高鳥浩介氏は「消費者や企業、行政などさまざまな立場の人たちがカビ制御やカビ対策に苦慮している。その一方で、カビの悩みに対して専門的な見地から相談できる場所がない」という状況を鑑み、平成20年に国衛研を退職した直後に、NPO法人カビ相談センターを設立し、自ら理事長に就任した。同センターでは、衣食住に起因する多種多様なカビ問題の相談に対応してきた他、カビ関連の情報提供や教育・研修活動などを展開してきた。1月4日設立12年目を迎える高鳥理事長に、センターの活動概要から、食品施設におけるカビ対策の基本的な考え方で伺った。

——センター設立の背景について

高鳥 国衛研で厚生行政に携わる中で、一般消費者や企業、あるいは行政関係者まで、カビ関連の悩みを

抱えている人は多いのに、相談できる場所がない。相談できる場所がなくて困っている姿を何度か目にしている異物」などでクレームになりやす

も行政上の取締り対象にはなりません。カビは「目に見える異物」なのでクレームになりやす

く、かつ「適切に対応しなければ、なかなか消費

者に納得してもらえない」といってクレーム対応

の難しさもあります。その背景から「専門家の見地からカビ相談に対応できる窓口を作り

たい」と考え、当センターを設立しました。

——事業について

高鳥 第一にカビ相談

です。電話、メール、来所による相談に対応しています。2017年の相談件数は134

4件で、内容は食品・医薬品、化粧品、生活環境など多岐にわたります。食

品関係の企業・行政からの相談は全体の約4分の

1で、内容は発生原因や消費者対応、再発防止策

などに関するものが多いです。最近「組織内

でカビ相談に対応できる人材を養成したい」とい

う相談も増えています。第二に情報発信です。

講演会、セミナー、シンポジウムのほか、企業や保健所などでの出張講習

も行っています。第三に刊行物の発行で

す。年2回の会誌「かびと生活」や、「カビ苦情

・被害管理マニュアル」(既刊5巻、毎年1冊刊

行)の発行、専門書の執筆などを行っています。

第四に技術指導や研修です。初心者を対象とし

た基礎研修、中級者以上を対象としたステップアップ研修、外部での出張研修などを行っています。

——食品現場でのカビ対策のポイントについて

高鳥 予防対策を講じる際は、カビの生態を知ることが極めて重要で

す。例えば、カビは酸素がある場所ではかかるとい

るので、脱酸素剤などは有効です。また、物体の表面で生えるので、現場

では日々の洗浄・消毒が重要です。カビの除去は、表面に付着している

状態では容易ですが、菌糸を伸ばして内部へ入り込むと、除去は極めて

困難になります。「予防」という観点から極めて

重要です。また、乾燥した環境で

カビは生えないので、水分や湿度の管理も有効で

す。一般に相対湿度が60%以下で生えることはほとん

どありません。空気が淀みやすい箇所(例えば部屋の隅など)を中心

に定期的な湿度測定を推奨します。排水溝など水

周りの定期的な洗浄・消毒も徹底すべきです。

空気の管理もポイントです。空調のフィルターやHEPAフィルターなどの管理を怠ったためにカビが発生した事例は多いです。「フィルターがあるから大丈夫」と過信せず、メンテナンスの計画を立てておきましょう。

また、カビは埃に乗って移動します。最近では発塵しにくい衣服なども増えています。

——カビ苦情が発生した際、企業対応において大切なことは

高鳥 一般論ですが、まず状況の把握に努めて

ば、対応が1日遅れるだけで、食品上のカビの生え方は大きく変化します。現物が持ち込まれた場合は、すぐに写真を撮影することを徹底しましょう。

——カビであるかの確認も必要です。綿埃などをカビと見間違えるケースは少なくありません。

分析を行った場合は、結果に基づいて現場改善、再発防止対策を行います。また、分析結果は製造者・販売者・消費者など関係者で共有しましょう。

——検査と検査法に関するアドバイス

高鳥 検査については、製品検査だけでなく、環境検査にも目を向けてほしいと思います。湿気や埃が発生しやすい箇所、空気がよどみやす

い箇所などの定期的なモニタリング検査を推奨します。

検査法は従来からの培養法が一般的ですが、最近では遺伝子手法も進歩して判断しやすくな

っています。ただし遺伝子手法は、現時点では精度面の課題があるように思

います。またカビ検査では、一つの検体から複数の種が分離されるのが一般的です。「どの種が優勢か?」の推測は、培養法であれば(培地上での生え方を観察すれば)わかりますが、遺伝子手法の結果だけでは困難です。検査法を選択する際は、「検査結果を現場改善や再発防止に活かす」という点まで考慮して判断しやすくな

っています。ただし遺伝子手法は、現時点では精度面の課題があるように思

います。またカビ検査では、一つの検体から複数の種が分離されるのが一般的です。「どの種が優勢か?」の推測は、培養法であれば(培地上での生え方を観察すれば)わかりますが、遺伝子手法の結果だけでは困難です。検査法を選択する際は、「検査結果を現場改善や再発防止に活かす」という点まで考慮して判断しやすくな

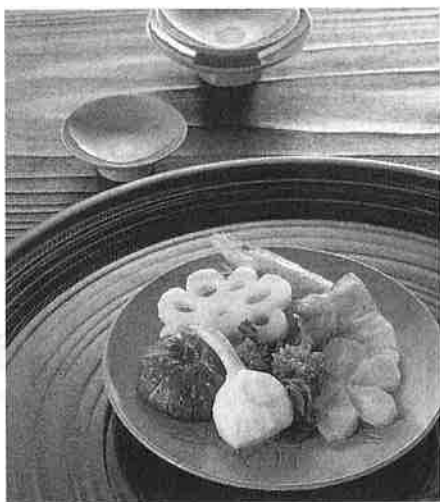
っています。ただし遺伝子手法は、現時点では精度面の課題があるように思

います。またカビ検査では、一つの検体から複数の種が分離されるのが一般的です。「どの種が優勢か?」の推測は、培養法であれば(培地上での生え方を観察すれば)わかりますが、遺伝子手法の結果だけでは困難です。検査法を選択する際は、「検査結果を現場改善や再発防止に活かす」という点まで考慮して判断しやすくな

っています。ただし遺伝子手法は、現時点では精度面の課題があるように思

います。またカビ検査では、一つの検体から複数の種が分離されるのが一般的です。「どの種が優勢か?」の推測は、培養法であれば(培地上での生え方を観察すれば)わかりますが、遺伝子手法の結果だけでは困難です。検査法を選択する際は、「検査結果を現場改善や再発防止に活かす」という点まで考慮して判断しやすくな

っています。ただし遺伝子手法は、現時点では精度面の課題があるように思



ています。ただし遺伝子手法は、現時点では精度面の課題があるように思

います。またカビ検査では、一つの検体から複数の種が分離されるのが一般的です。「どの種が優勢か?」の推測は、培養法であれば(培地上での生え方を観察すれば)わかりますが、遺伝子手法の結果だけでは困難です。検査法を選択する際は、「検査結果を現場改善や再発防止に活かす」という点まで考慮して判断しやすくな

っています。ただし遺伝子手法は、現時点では精度面の課題があるように思

います。またカビ検査では、一つの検体から複数の種が分離されるのが一般的です。「どの種が優勢か?」の推測は、培養法であれば(培地上での生え方を観察すれば)わかりますが、遺伝子手法の結果だけでは困難です。検査法を選択する際は、「検査結果を現場改善や再発防止に活かす」という点まで考慮して判断しやすくな

っています。ただし遺伝子手法は、現時点では精度面の課題があるように思

います。またカビ検査では、一つの検体から複数の種が分離されるのが一般的です。「どの種が優勢か?」の推測は、培養法であれば(培地上での生え方を観察すれば)わかりますが、遺伝子手法の結果だけでは困難です。検査法を選択する際は、「検査結果を現場改善や再発防止に活かす」という点まで考慮して判断しやすくな

っています。ただし遺伝子手法は、現時点では精度面の課題があるように思

います。またカビ検査では、一つの検体から複数の種が分離されるのが一般的です。「どの種が優勢か?」の推測は、培養法であれば(培地上での生え方を観察すれば)わかりますが、遺伝子手法の結果だけでは困難です。検査法を選択する際は、「検査結果を現場改善や再発防止に活かす」という点まで考慮して判断しやすくな

っています。ただし遺伝子手法は、現時点では精度面の課題があるように思

います。またカビ検査では、一つの検体から複数の種が分離されるのが一般的です。「どの種が優勢か?」の推測は、培養法であれば(培地上での生え方を観察すれば)わかりますが、遺伝子手法の結果だけでは困難です。検査法を選択する際は、「検査結果を現場改善や再発防止に活かす」という点まで考慮して判断しやすくな

っています。ただし遺伝子手法は、現時点では精度面の課題があるように思